様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３５３０９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６００２

研究課題名（和文）里親の語りと肯定的感情から捉える受託率向上と里親支援の研究

研究課題名（英文）Reserch on improvement of entrustment rate and support of foster parents based on interviews and their positive emotions

研究代表者
石井　陽子（ISHII, Yoko）

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師

研究者番号：２０７３７３９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、里親の肯定的感情に着目し、里親が肯定的感情の獲得に至るプロセスおよび影響要因を明らかにすることを目的に、養育里親を対象にインタビュー調査とアンケート調査を実施した。その結果、里親が肯定的感情に至るプロセスにおいては、困難を乗り越えた経験が肯定的感情に影響しており、そこには地域の様々なサポートが存在していたことが明らかとなった。また、地域とつながりをもつ里親の満足感が高いことが明らかとなり、生活拠点である地域における里親支援の継続が重要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
里親研究において看護関連のものは少ない。このような状況下、公衆衛生看護の視点から地域における里親支援の課題に言及できたことは、本研究の学術的意義であり、看護職の里親理解の一助となったと考える。また、国が示す「切れ目のない子育て支援」には里親も含まれている。本研究により、里親支援は児童福祉の専門的支援はもちろん、地域保健、医療、教育等様々な分野がチームとなって行う必要があることを示すことができた。里親が暮らしやすい地域づくりが里親の肯定的感情につながり、ひいては里親の増加、すなわち受託率向上に反映される可能性の示唆を得られたことが、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：In this research, we focused on the positive emotions of foster parents, and conducted an interview survey and a questionnaire survey for foster parents with the aim of clarifying the process and the factors that influence foster parents' positive emotions. As a result, in the process of foster parents reaching positive emotions, it was revealed that the experience of overcoming difficulties receiving various local support influences their positive emotions. In addition, it was revealed that the foster parents who are connected to the area have a high level of satisfaction. These findings suggest that it is important to continue support foster parents in the area where they live.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：里親　里親家族　肯定的感情　地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

児童虐待等により家庭で育てられない子ども（要保護児童）を社会の責任で養育する「社会的養護」では、児童の健全な育成を図るため家庭的養護が優先され、里親委託が推進されている。要保護児童は約 45,000 人存在する（2017 年 3 月末）が、日本では児童養護施設等における施設養護が多くを占めており、里親等委託率は 9.5%（2006 年度末）から 18.3%（2016 年度末）と 10 年でおよそ 2 倍になったものの、同時期のドイツやアメリカの 50%、デンマークの 58%等、諸外国と比較すると低い状況にある。さらに、日本国内においても自治体間で里親等委託率には格差が生じている。

国は新しい社会的養育ビジョン（2017 年 8 月）により、3 歳未満の里親委託率を概ね 5 年以内に 75%にする等の高い目標を掲げ、里親委託推進を進めている。

里親や里子に関する研究も徐々に増加しており、里親の動機では児童福祉への理解が最多を占めるものの、里子の問題行動や実子との関係等における対処困難を指摘する研究も散見される。一方、ソーシャルサポートや里親研修等の里親支援が里親のストレス軽減に有用との指摘もあり（奈良，2011；三谷，2013)、専門里親としての心理プロセスでは、最終的に「人生が豊かになる」に行きついていたことが報告されている（中村，2016)。このような充実感や満足感、幸福感等の肯定的感情は、仕事への満足感や心身の健康に正の影響を与えることが報告されており、また、肯定的感情は困難を乗り越えるために必要な強みを育成し、強化することも明らかとなっている。

里親委託の推進には、里親制度の発展、すなわち、里親になる人を増やすことが欠かせない。里親が里子を養育する過程は決して平坦な道のりではないと推測されるものの、里親が肯定的感情にたどり着いているとするならば、そのような感情に至る里子の養育過程を詳細に明らかにすることは、現在里親をしている人たちの道標となり里親継続につながる。また、新たに里親を目指す人には、里子養育の具体的イメージを付与できると考える。さらに、里親の肯定的感情への影響要因を明らかにすることにより、里親支援の示唆をも得ることができる。

## ２．研究の目的

上述の背景をもとに、本研究は里親の肯定的感情に着目した研究を行った。研究目的は、（１）里親が肯定的感情の獲得に至るプロセスを明らかにする、（２）里親の肯定的感情に影響を及ぼす要因を明らかにする、の 2 つである。

## ３．研究の方法

日本の里親制度において最多を占める養育里親を対象に、2 つの研究を実施した。

### （１）インタビュー調査

1 年以上養育里親をしており、「養育里親になってよかった」という思いに至っている里親を対象に、半構成インタビューを実施した。インタビュー内容は、養育里親になって大変だったこと、乗り越え方、養育里親になってよかったと思う理由である。分析は、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（Modified Grounded Theory Approach: M-GTA）を用いた。

### （２）アンケート調査

全国 66 か所の地域里親会中、協力の得られた 32 か所の地域里親会を通じ、養育里親世帯 2,142 世帯を対象に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。

調査内容は、活動満足感、個人要因（①里親に関して：年齢、性別、婚姻状況、就労状

況、里子の受託経験、養育里親歴、専門里親資格の有無、実子の有無、②里子に関して：年代、被虐待経験および障害の有無）、個人レベルのソーシャルキャピタル要因：居住地域の居心地・愛着、地域活動、近所・里親・友人とのつきあい等を尋ねた。活動満足感は 8 項目、4 件法（合計 24 点満点）で尋ねた。分析は、記述統計、多変量解析を行った。

## ４．研究成果

### （１）インタビュー調査

インタビュー調査の結果、養育里親が里子の養育を通じて肯定的感情を獲得していくプロセスは、“ 模索しながら養育里親を続けるプロセス ” と、“ 養育里親を続けることの意味を見出すプロセス ” の 2 つがあることが明らかとなった。

“ 模索しながら養育里親を続けるプロセス ” は、里子との生活が始まり、里親が「親役割」や夫婦・家族で「役割分担」し【養育里親役割を遂行】するなかで「里子や実子の対応に苦慮」し、「緊張を強いられる体験」をすることもあり「複雑な心境」に陥る。一方、里子との「短期間での別れの辛さ」を経験することもあり、養育里親の気持ちは、里親をやめようかという【葛藤と苦悩】に突き当たり、幾度となくその思いに苛まれながらも、「里子のためを考える」ことや大変と思う「夫婦の認識のずれ」、また、里親自身の対処行動により【踏みとどまる選択】に至り、再び【養育里親役割を遂行】するという循環のプロセスであった。

“ 養育里親を続けることの意味を見出すプロセス ”は、養育里親が、里子と「本音で関わる」、「里子も自分も信じる」という【信念と覚悟】のもと、周囲の［様々な形のサポート］を受けながら生活するなかで、「里子が良い方向に変化する」ことや「実子が同じ道を歩む」という変化から、【養育里親活動が実を結んできたと実感】し、【里子を含めて家族】という認識に至り、家族なのだから「良いことも悪いことも当たり前」と捉えるようになっていく。そして、「里子が頼れる場所となる満足感」や「里子の成長をみる嬉しさ」、里子との出会いと生活に「感謝と幸せ」を感じ、生活を楽しむことや自身の成長を実感し、【養育里親になってよかった】という思いに至るプロセス ” であった。

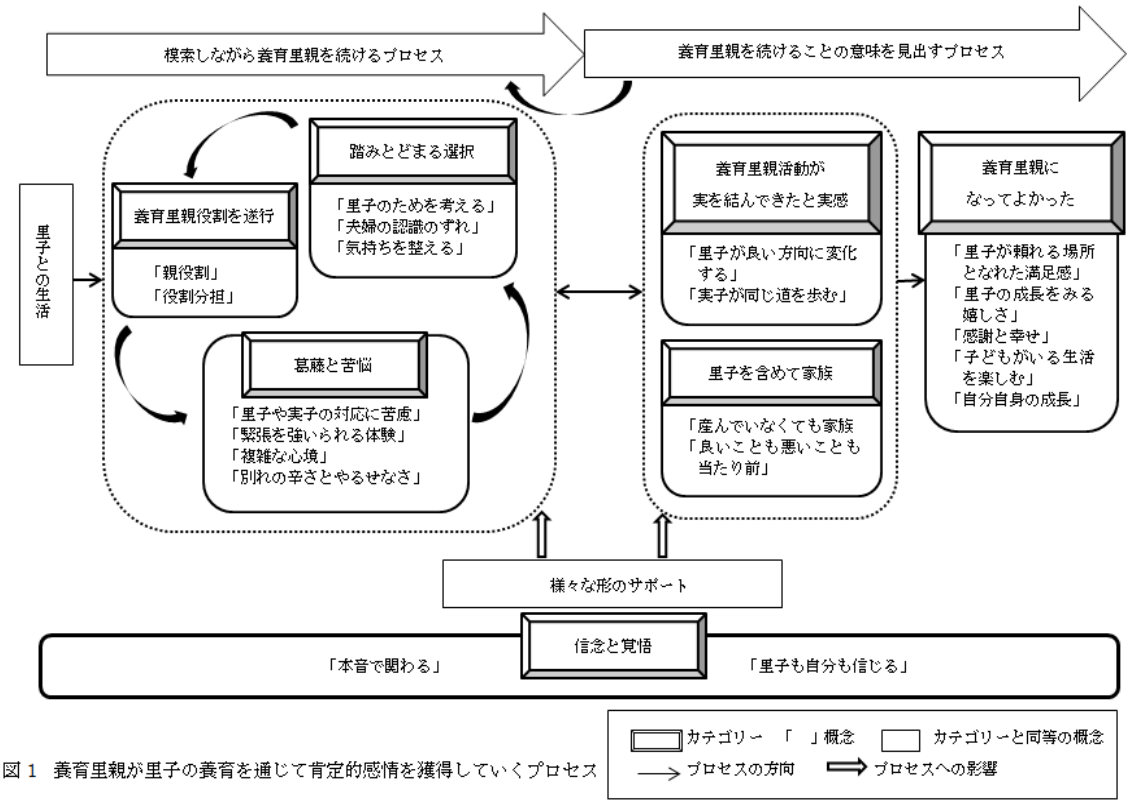


図 1　養育里親が里子の養育を通じて肯定的感情を獲得していくプロセス

（２）アンケート調査

養育里親世帯 2,142 世帯中、1,052 世帯から質問紙を回収した（回収率 49.1%)。そのうち里子の受託経験があり、調査項目に記入漏れがない 769 人を分析対象とした(有効回答率 35.9%)。

養育里親の平均年齢は 55 歳±9.9 歳、性別は女性が約 7 割、就労ありが約 7 割、養育期間の平均は 11.1±8.7 年、里子の受託人数平均は 4.9±9.2 人で 1 人が最も多かった（37%)。また、被虐待経験のある里子の受託は半数以上、障害のある里子の受託も約 4 割が経験していた。

分析の結果、以下のことが明らかとなった。(　) 内は平均値±SD を示す。

①個人要因（里親関連）

活動満足感と統計学的に有意な差がみられたのは、年齢（30 代 20.1±3.8、60 代 19.2±4.1)、養育里親歴（5 年未満 20.3±3.8、6-10 年 19.9±3.8、11-20 年 19.4±3.7、21 年以上 18.9±4.1)、調査時点での里子の受託の有無（有 20.0±3.7、無 19.1±4.1）であった。

②個人要因（里子関連）

年代、被虐待経験および障害の有無のいずれも、活動満足感との統計学的な有意差はみられなかった。

③個人レベルのソーシャルキャピタル要因

活動満足感と統計学的に有意な差がみられたのは、居住地域への居心地（よい 19.9±3.8、よくはない 16.5±4.6)、愛着（ある 19.9±3.8、特にない 18.0±4.1）、地域活動の参加（有 20.1±3.7、無 19.4±4.0）、近所とのつきあい（有 20.0±3.8、無 19.0±3.8）近所への里親の周知（有 19.8±3.8、無 18.7±4.5）、里親仲間との交流（有 20.5±3.2、無 19.6±4.0）、里親以外の友人と交流（有 20.2±3.6、無 19.2±4.1）であった。

（３）総括

以上の研究成果を踏まえ、考察を述べる。

①里親が肯定的感情の獲得に至るプロセスと里親支援

里親が肯定的感情を獲得するプロセスにおいては、危機を乗り越える経験が重要なプロセスとなっていた。しかしながら、それは容易なことではなく、里親自身の努力のみならず、様々なサポートのもと里親として踏みとどまる選択に至っていた。養育里親が葛藤と苦悩の状態にあるときに、踏みとどまる選択ができるよう、周囲が気づき支援を行うことが重要と考える。また、養育里親として里子や実子の変化を実感するには、長い年月生活をともにする過程も必要であった。

上述のプロセスに沿って具体的に支援を考えると、3 つの支援、すなわち、1)養育里親が「里子や実子の対応に苦慮」していることへの児童相談所、里親経験者、市町村の子育て相談等による直接支援、2)養育里親が【葛藤と苦悩】の状態にあるときに【踏みとどまる選択】に至ることができるような児童相談所，地域住民や医療機関，学校，里親会，里親仲間，友人等，多様な人々や関係機関による支援、そして、3)身近な場で養育里親の生活に寄り添う支援が考えられた。

②里親の肯定的感情に影響を及ぼす要因

養育里親の活動満足感に統計学的に有意な差がみられた個人要因は、里親の年齢が若い、養育里親歴が 5 年未満、現在里子を受託しているであった。これらの結果からは、養育里親となったできる限り早期の段階から、養育里親に里子受託の機会を提供することが活動満足感につながると考えられた。

また、個人レベルのソーシャルキャピタル要因では、地域活動や里親仲間、それ以外の友人

**等とのつきあいがある人の活動満足感が高く、統計学的にも有意な差がみられた。居住地域において日常的に社会参加や他者との交流の機会がある人の里親活動の満足感が高いことから、養育里親を孤立させない地域づくりが大切と考えられた。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>石井陽子、富田早苗、波川京子 | ４．巻<br>22(3) |
| ２．論文標題<br>里親家族の始まりー里親からのアプローチと家族の反応ー | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>日本地域看護学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>26-33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>https://doi.org/10.20746/jachn.22.3_26 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>石井陽子、富田早苗、波川京子 | ４．巻<br>19(1) |
| ２．論文標題<br>養育里親が里子の養育を通じて肯定的感情を獲得していくプロセス | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>インターナショナルNursing Care Research | ６．最初と最後の頁<br>1-11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>石井陽子、富田早苗、波川京子 |
| ２．発表標題<br>養育里親インタビュー結果にみる里親支援への示唆 |
| ３．学会等名<br>第77回日本公衆衛生学会総会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>石井陽子、富田早苗 |
| ２．発表標題<br>里親家族の始まり―家族へのアプローチの家族の反応― |
| ３．学会等名<br>第38回日本看護科学学会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>石井陽子、富田早苗、波川京子 |
| ２．発表標題<br>養育里親の活動満足感と活動負担感を測定する項目の検討 |
| ３．学会等名<br>第78回日本公衆衛生学会総会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>石井陽子、富田早苗、波川京子 |
| ２．発表標題<br>養育里親の活動満足感と活動負担感に関連する要因の検討 |
| ３．学会等名<br>第6回日本フォスターケア研究大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>富田早苗、石井陽子 |
| ２．発表標題<br>里親経験者の活動状況と関係機関との連携（第一報） |
| ３．学会等名<br>第8回日本公衆衛生看護学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yoko Ishii, Sanae Tomita |
| ２．発表標題<br>Development of satisfaction and burden scales for foster parents activity |
| ３．学会等名<br>The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 富田　早苗<br>(Tomita Sanae)<br>(00448797) | 川崎医療福祉大学・保健看護学部・教授<br>(35309) | |
| 連携研究者 | 波川　京子<br>(Namikawa Kyoko)<br>(30259676) | 川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授<br>(35309) | |